

## 第7回（定例）兵庫県教育委員会会議録

### 1 開会・閉会の年月日時及び場所

令和3年7月1日（木）15:00～16:20

神戸市中央区下山手通5丁目

兵庫県教育委員会教育委員会室

### 2 会議に出席した者の職氏名

教育長	西上教育長	
教育委員	清水委員	牧村委員
	空地委員	横山委員
事務局	西田教育次長	唐津教育次長
	吉田事務局参事兼総務課長	高橋教育企画課長
	稲次教職員課長	吉田福利厚生課長
	村田義務教育課長	小俵特別支援教育課長
	西田高校教育課長	杉谷社会教育課長
	北中体育保健課長	田村スポーツ振興課参事

### 3 署名委員の指名等について

(1) 署名委員は、西上教育長の指名により、次のとおり決定された。

牧村委員 横山委員

### 4 前回会議録の承認に関する件

#### 第6回（定例）兵庫県教育委員会会議録の承認

第6回定例教育委員会における教育長の報告1件、議事3件、報告事項3件の会議録について、吉田事務局参事兼総務課長が説明し、全員異議なく承認された。

### 5 教育長の報告

#### (1) 兵庫県新型コロナウイルス感染状況

兵庫県新型コロナウイルス感染状況について、北中体育保健課長が報告した。

### 6 議事

#### (1) 第25号議案

##### 兵庫県立図書館協議会委員の委嘱（任命）

図書館法第15条及び兵庫県立図書館の設置及び管理に関する条例第8条第3項の規定に基づき、12名を標記委員に委嘱（任命）することについて、杉谷社会教育課長が説明し、審議の結果、賛成全員で原案のとおり決定された。

### 7 報告事項

(1) 今後の県立学校におけるICTを活用した教育の展開

BYOD導入による1人1台端末の実現等、今後の県立学校におけるICTを活用した教育の展開について、高橋教育企画課長が報告した。

**(2) 令和3年度新型コロナウイルス感染症の影響に関する心のケアアンケート第1回調査結果**

長期にわたる新型コロナウイルス感染症の影響により、精神的に不安定な状況にある児童生徒の状況を把握し、その心の理解とケアへの取組に資する標記アンケートの調査結果について、村田義務教育課長が報告した。

**(3) 教職員のメンタルヘルス（新型コロナウイルス拡大の影響）**

新型コロナウイルス拡大の影響等を分析・考察した教職員のメンタルヘルスについて、吉田福利厚生課長が報告した。

**(4) 明石海峡大橋ブリッジラン（仮称）の開催の決定**

ゴールデン・スポーツイヤーズのレガシーの継承として、令和4年秋頃に開催することが決定した明石海峡大橋ブリッジラン（仮称）について、田村スポーツ振興課参事が報告した。

**8 委員の主な意見及び事務局の説明**

**(1) 令和3年度新型コロナウイルス感染症の影響に関する心のケアアンケート第1回調査結果**

（空地委員）

今回の調査と比較している令和2年度3回目の調査時期はいつ頃か。

（村田義務教育課長）

1月の緊急事態措置実施期間に入った時期である。

（空地委員）

今回の調査は、感染者が非常に多い時期なので、状況としては1月と変わらない。ストレスを抱える子どもへの支援の中で何が役に立ったかを調査できれば、今後さらに支援を広げていくことができるのではないか。また、感染状況と子どものストレスの関係性を調べるため、感染状況が異なる前年度の3回目以外の調査結果とも比較することが必要ではないか。

（村田義務教育課長）

実際には前年度1～3回全ての調査と比較しているが、数字的に大きな変化はない。スクールカウンセラーに聞くと、コロナに対して恐怖感を感じる子どもは減っている一方、ソーシャルディスタンスという言葉を使ったいじりなどがあり、疎外感を感じている子どもがいるようであり、個に応じたより添った対応が必要であると感じている。

（空地委員）

コロナ禍でいじめなどの問題は増えてきているのか。

（村田義務教育課長）

まだ正確な数字を取ってはいないが、大きく変わっていないと思う。ただし、スクールカウンセラーによると、密がいけないことから子どもたちが孤独感を感じていることがこれまでとの相違点で、それを背景とする様々な問題行動があることが予想される。

(清水委員)

コロナによって、大きな声を出して遊ぶことや、食事中に会話を楽しむこともできなくなった。子どもたちもそれが習慣化され、これまで以上に自己表現や自己主張ができなくなっている。自分の心情を自由に表現する機会が押さえられてしまっていないか。

(村田義務教育課長)

学力調査でも自分の思いを伝えることが難しいと出ている中、今はなんでもダメとなってしまっており、子どもにストレスがかかっている。今後、発信する予定の動画には、「声に出して相談しよう。」と伝えるメッセージを入れようかと思っている。授業や特別活動の時間などで、子どもたちが自由に発言できる時間を少しでも取ることを意識するなど、教員側にも継続的に呼びかけていきたい。

(西上教育長)

高校段階では、生徒が机を集めて話をするなどグループ活動が徐々に再開してきているが、食事をする場面などでは、会話をしないことが徹底されている。子どもたちが声を出してもよい場面をつくることは必要と感じている。

(横山委員)

3 ページの「自分の気持ちがリラックスする方法を知っていて、実際にやっている」という設問では、否定的な回答をした児童が増えているが、設問に2つの条件があるため、「知っているけどやっていない」なのか、「そういう知識を聞いていないから分からなくてやっていない」なのか、判断が難しい。

また、4 ページの「困ったことがあったとき、人に助けを求める」という設問では、困ったことがあるという認識を子どもがどう捉えているかで設問の回答が変わってくるため、どう考えればよいのか悩ましく感じる。

(村田義務教育課長)

委員ご指摘のとおり、困ったことと言われても6年生でも様々であり、設問の聞き方、質問紙の難しさを感じている。子どもたちがどんなふう感じて答えているかというのは、これでは読めないので、教員が目の前の一人一人の子どもにしっかりと対応することが必要になってくると感じている。また、今までの調査の積み重ねがあるので、質問紙を変えることも難しいと感じる。

(西上教育長)

今後も継続的に必要性があるかどうかを見極めながら、次回11月に向けて、新たな質問の追加などを検討したい。

## (2) 教職員のメンタルヘルス（新型コロナウイルス拡大の影響）

(清水委員)

コロナの影響で民間が就職難となり、教員採用の応募人数が増えてもおかしくないのに過去最低だった。教員の仕事が、大変だから敬遠されてしまったのかもしれないが、魅力ある目指したい仕事では無くなってきているのではないかと危惧する。

(西上教育長)

学校現場がいわゆるブラック職場だと、教員になろうか民間で働こうかと迷っている学生が民間に流れてしまう。引き続き、働き方改革も進めていきたい。

(空地委員)

ストレスチェックの取組が始まって数年が経過した。自分でストレスに気づいてそれに対処するというのが本来の目的であり、うまく働けば、ストレス対応というのが個別にできる可能性がある。しかし、学校という狭いコミュニティでは、個人情報等もあり、難しい面もある。教員のストレス緩和のため、うまく機能しているかどうか、チェックすることも必要ではないか。

(吉田福利厚生課長)

ストレスチェックの実施率を上げるよう各学校に依頼しているが、面接指導については、ここ2年ほど17名程度にとどまっている。しっかりと面接指導を申し出られるような形を構築していきたい。

(空地委員)

全体の対象人数は何人か。

(吉田福利厚生課長)

ストレスチェック対象者は、令和2年度で1万1,645人である。

(空地委員)

ストレスフルな環境であるにもかかわらず、一般の企業から比べると面接指導の件数が少なく感じるので、ストレスチェックなどを是非利用して欲しい。

## 9 閉 会

以 上